

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金

企画研究プロジェクトⅡ(教員・学生参加型) 2015年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	スポーツウエルネス学科・3年	山田 志織
指導教員	所属・職名	氏名
	スポーツウエルネス学科・助教	安藤 佳代子
研究課題	シッティングバレー教室で実際に体験し、障がい者への理解を深めると同時に普及を図る。	
プロジェクト 分担者	尾崎 莉緒・児玉 遥香・千葉 滉一郎・武田 岬	

プロジェクトの内容及び成果の概要

1. 目的・概要

2015年12月5日(土)、講師としてシッティングバレーボールの女子日本代表の真野監督と、日本代表選手・コーチ6名の合計7名を立教大学にお招きし、立教大学生19名を対象にシッティングバレー教室を開催した。シッティングバレーの一番の特徴としては、床に座ったままの状態でもボールに合わせて動き、上半身だけを使ってプレーすることである。座ったままの状態でも移動したりプレーしたりすることの難しさや、障がいがあることで日常生活にどのような影響があるのかを、多くの学生に理解してもらおうと共に、シッティングバレーをはじめとした多くの障がい者スポーツの普及に繋げることを目的に体験会を企画した。また、立教大学生にはこの経験を活かして、社会には障がいを持っている人々がいることを十分に理解し、障がいの有無も含めさまざまな視点で物事を考え、ハンディのない社会づくりに貢献できることに繋がってほしいと考えた。

2. 実施内容

始めにパラリンピック競技種目であるシッティングバレーボールについて、競技説明やどんな障がいの方がプレーしているのかなどをお話しいただいた。

その後、日本代表選手の皆さんで動きや基本的なスキルを実演して見せていただきながら、シッティングバレーボールの特徴について理解をし、講習会に入った。

まずは全員で上半身を中心としたストレッチを行い、チーム分けをしてから基本練習を行った。各チームに一人講師の方についていただき、お尻をつけたまま素早く動く練習やトス、スパイクの練習等をし、最後に各チーム総当たり戦を行った。また、日本代表チームと立教大学女子バレーボール部チームに分かれエキシビジョンマッチをした。試合後に質疑応答の時間を設け、最後に講師の方々から一言ずついただいて終了した。

3. 成果・考察

講習会を通じて、競技だけではなく選手の障がいについて知ることでも非常に良かった。また、小中学校での体験会の増加や行政や企業からも講習会が増えていることもお話しくださり、今後活かせる体験につながると考えられた。

体験会の実施前後に、障がいに対するイメージや障がい者スポーツの認知度や関心度についてのアンケートを行った。体験前後でアンケート結果を比較してみると、障がいに対するイメージは大きく変化し、パラリンピックを直接会場で観戦したい人の割合も増加した。この体験会によって、目的していた学生の障がいへの理解とさまざまな物事に対して考え方の幅を広くし、社会に貢献していけるきっかけづくりになったと考える。このように、障がいへの理解を深めていくと共に、障がい者スポーツの普及を進めていく活動を今後も行っていく必要があると感じた。

